応援活動に従事する大学生補欠アスリートの 心理的変容プロセスに関する事例研究 ：語りに着目して

A Case study of the psychological transformation process of a reserve
college student athlete engaging in cheering activities
：Focusing on narrative

福井 邦 宗：Kunimune FUKUI¹
豊田 則 成：Norishige TOYODA²

- 1 国立スポーツ科学センター：Japan Institute of Sport Science
3-15-1 Nishigaoka, Kita-ku, Tokyo 115-0056 Japan
- 2 びわこ成蹊スポーツ大学：Biwako Seikei Sport College
1204 Kitahira, Otsu-shi, Shiga 520-0503 Japan

Abstract

The purposes of this study were ① to clarify the psychological transformation process through cheering activities based on the narrative of a reserve college student athlete engaged in team cheering activities, and ② to present the hypothetical knowledge which represent the significance of cheering activities and contribute to better sports fields. A semi-structured interview was conducted with one reserve college student athlete to explore how he had recognized cheering activities. Data were analyzed using the Qualitative Synthesis Method. A schematic diagram of the psychological transformation process of the reserve college student athlete was generated based on the 13 labels gathered through the analysis. The following four outcomes were derived from the schematic diagram: 1) the promotion of psychological maturity by adapting to the psychological conflict caused by cheering activities, 2) the possibility that collective cohesion and collective efficacy improved through cheering activities, 3) the probability that cheering activities could be an opportunity to develop sports self-management skills, and 4) the visualization of the psychological transformation process of the reserve college student athlete through the cheering activities. These outcomes are expected to contribute to maintaining the motivation of reserve college student athletes and promoting their participation in cheering activities, improving the team feeling, and their psychological maturity through cheering activities.

1. 緒言

近年、日本オリンピック委員会(2014)が「選手のパフォーマンスを最大限発揮できるよう連携協力する、選手を取り囲む関係者」と定義されるアスリート・アントラージュの充実に向けた活動を精力的に行っており、文部科学省(2014)も文部科学白書においてトップアスリートの強化活動の充実を掲げている。また、アスリートにとって環境の変化が実力発揮や競技力向上に影響すること(林・土屋, 2012)、アスリートを支援する際には個人特性だけではなく、置かれている競技環境の性質や状態を理解することが必要であること(米丸・鈴木, 2015)が言及されている。これらのことから鑑みて、パフォーマンス向上に日々取り組むアスリートの実力発揮のために、彼ら自身の取り組みのみならず、彼らを取り巻く環境を充実させることが現在のスポーツ界では重要視されていることが窺える。アスリートを取り巻く環境を作り上げている要因の一つとして、同じチームや集団で活動する他者の存在が考えられる。他者の存在は実施者のパフォーマンスに影響を与えることが示唆されており(Triplett, 1898)、その影響はAllport(1920)が定義する社会的促進等によって古くから明らかにされている。加えて、集団で行うスポーツ活動には相互作用の機会が豊富に含まれており、スポーツを通じた人間関係の学習は仲間づくりの促進にも効果的であることが示唆されている(渋谷・小泉, 2003)。これらのことから、アスリートが実力発揮をするための環境を作り上げる上で集団内の他者の存在は大きな役割を担っていることが考えられる。

青少年のスポーツ参加機会に目を向けると、日本国内ではこれまで主として学校の運動部参加に媒介されている(山本, 1991)。スポーツ参加機会の中核を成す運動部活動は主に学校単位で行われており、一般的に主要大会に出られるのは一校につき一チームのみとされている(種谷, 2016)。競技種目により出場人数は異なるが、限られたチーム登録数と部員数の関係を鑑みると、所属人数が多い部活動においては主要大会時に「補欠」が存在することになる。補欠とは、「主要な大会に選手として出場していないもの」と定義されている(種谷, 2016)。補欠と一言に表しても、メ

ンバー登録はされているが出場出来ない選手もいれば、そもそも出場権を得られていない選手もある等、状況が異なる選手が多く含まれることになるが、先述の定義と併せて鑑みると、総じて実力不足や怪我等の様々な理由により主要な試合もしくは大会に出場することが出来なかったアスリートのことを指していると言える。試合当日の補欠アスリートは、試合に出場するアスリートのサポート等、チームの活動に従事することが多く、所属人数が多い部活動ではサポートの一環として応援活動が行われることがしばしば見受けられる。実際に運動パフォーマンスには重要な他者の存在が影響していることが示されており(磯貝, 1993)、また、補欠アスリートの部活動継続理由には支援することの面白さやサポーターとしての関わりも含まれている(山崎・鈴木, 2015)。そのことから、応援活動等のチームサポートに従事する補欠アスリートの存在が所属部活動の活性化に一役買っていること、試合に出場しているアスリートの実力発揮に重要な役割を担っていることが考えられる。

このように部活動はスポーツの楽しさや喜びを味わい、学校生活に豊かさをもたらす意義を有しており(文部科学省, 2000)、多くの時間を費やす部員にとって所属部活動への適応感は精神に強く影響し、人格適応感を規定する要因にもなることが示唆されている(桂・中込, 1990)。一方で、井上ほか(2010)は、国内ではそのようなスポーツの場を効果的に生かしきれていない現状を明らかにしている。例えば2019年度の高校野球の部員数を見てみると、総加盟校3,957校に対し総部員数は143,867名であり(日本高等学校野球連盟, 2019)、全国高校野球選手権大会の選手登録数18名を基準とすると、全校に均等に人数を振り分けたとしても半数以上が補欠として部活動に関わっていることになる。このように、日本の運動部活動において補欠は当たり前に見られる、よく知られている存在である。しかし、セルジオ(2006)は、日本は主に学校単位でスポーツ活動が行われ、上述のように一校につき一チームしか公式戦登録出来ないため補欠が存在する状況と比較し、ブラジル国内ではクラブ単位でスポーツ活動が行われ、あるチームで試合に出場出来ない者が、出場出来

るチームを求めて移籍が可能であるため補欠が存在しないことを述べている。併せて、移籍も学校に縛られる等の日本の独自性を踏まえ、補欠という考え方は諸外国ではあまり見られない独特の文化であると示している。加えて、セルジオ（2016）はその影響によるスポーツ参加機会の不平等さの問題が生じていることも述べている。実際に、部活動は種々の要因から不適応を起こしやすいという否定的側面も含んでいることが言及されているように（和ほか，2011）、補欠という文化によって生じる問題は先行研究において様々挙げられている。例えば、部活動継続および退部の選択に強く影響する要因の一つとして、自身が所属部活動においてレギュラーであるかどうかがあることが挙げられており（青木，1989）、上級生の補欠に関しては、レギュラーになることへの諦めの感情を次第に有してしまうことも明らかにされている（山本，1991）。さらに横田（2002）は、補欠は運動部継続に伴う競技意欲低下や情緒的消耗が顕著に表れ、それが原因となりバーンアウト（中込・岸，1989）や退部につながる可能性も考えられることを述べている。このように、補欠という文化によって生じるアスリートへの心理的負担は大きく、種谷（2016）が指摘する部活動への葛藤を抱えてしまうことが考えられる。特に、自身が出場出来ない試合を目の当たりにしながら従事しなければならない応援活動は、心理的葛藤（レヴィン，1935）を生み出す重大な問題となりうる可能性は否めない。

しかし、そのような部活動の現状の中で、補欠アスリートという立場であっても、応援活動等のチームサポートに一生懸命に取り組みチームをけん引する部員の例も見られる。例えば、サッカー日本代表としてワールドカップに3大会連続で出場した経歴を持つ長友佑都選手が、大学1～2年生次は補欠としてスタンドで応援活動をけん引していたのは有名なエピソードである。彼自身も自著の中で、「スタンドで応援した経験は、プロになってからも忘れられない」（長友，2011）と当時の応援の経験を貴重なものとして語っており、応援活動は単なる辛い経験というだけでは無いことが考えられる。上述のように心理的負担が大きいと考えられる状況の中で、応援活動に懸命に取

り組む補欠アスリートはどのような心情で活動に従事し、その経験から何をを得ているのだろうか。

そのような背景の下、スポーツ現場における応援活動、および部活動における補欠アスリートに関連する先行研究を概観する。スポーツ現場における応援活動について、野球を代表とするプロスポーツで応援活動を行う有志のファンが、応援するチームに対して様々な意味的価値を持つようになることが示唆されている（藤本，2006）。また、スポーツ観戦および応援によって抱かれる感情はチームロイヤリティ、満足度、再観戦意図に影響し（隅野・原田，2005）、ファンは応援を通じて愛着（Laveries & Arnett, 2000）や、コミットメント（Mahony et al., 2000）、チームロイヤリティ（藤本ら，1996）等の心理的な結びつきを生成することが示唆されている。これらのことから、スポーツにおける応援活動は、応援されるアスリートの励みになるだけでなく、応援する者に様々な感情を生起させ、チームへの結びつきを向上させていることが考えられる。しかし、部活動において応援活動に従事しているのは、ファンとして最前線にしているプロスポーツチームを応援する観戦者ではなく、出場資格を持ちながらも試合に出場出来ない補欠アスリートである。よって彼らの立場で行う応援活動の意義を明らかにする必要があるが、学生スポーツまたは部活動における応援活動に着目した研究は、著者の知り得る範囲では見受けられなかった。次に、部活動における補欠アスリートの研究に関しては、先述した彼等の参加動機や中途退部の要因を明らかにしたものや、定められた項目の下でレギュラーと補欠の違いを明らかにしている研究はいくつか見られる（例えば、黒川，2013；野上，1997；山本，1990）。しかし、先行研究で挙げられた部活動の補欠が抱える問題点を改善するためには、補欠という立場で活動する者の心理面に着目し詳細に検討および記述したものや、活動を通じて生じた変化を捉える等の質的な観点からのアプローチが必要となる。

これらの先行研究を踏まえた上で本研究が目指すところは、補欠という文化を考慮した上で、補欠アスリートを含む全てのアスリートが、より良いスポーツ活動を送れる環境作りに貢献するための知見を導き出すことにある。試合に出場するア

スリートやチームにとって、補欠アスリートの存在および応援活動が実力発揮に重要な役割を担っていることは紛れも無い事実である。しかし、その補欠アスリートも出場権を有した選手であり、セルジオ（2016）が述べる補欠という文化の不平等さ故に出場出来ていないに過ぎず、彼等が抱える心理的負担は無視出来ない。そのような補欠という即座に変容し難い独特の文化の中で、チームの実力発揮と補欠アスリートの権利という2点を考慮した上で、全てのアスリートのより良いスポーツ環境を作り上げるためにはまず、補欠アスリートが従事する応援活動という機会の有効な活用手段を見出すことが必要となる。上述の長友（2012）のように、補欠や応援活動の経験を貴重なものと捉え、トップアスリートとなった後でも活かして活躍している事例も見受けられるため、応援活動は競技力向上の一助と成り得る可能性を有していることが考えられる。また、競技力向上に留まらず、生涯発達の視点から鑑みると、人生における一大事と称されるライフイベントを上手く乗り越えた経験は先行経験となり、その際使用されたライフスキルは将来遭遇するライフイベントでも活用されることが示唆されている（上野，2014）。このことから、部活動に関わるアスリートにとって心理的葛藤を生み出しかねない補欠の経験というライフイベントは、ライフスキルの獲得という成長の糧と成り得るとも言える。よって、心理的葛藤や競技意欲の低下、バーンアウトに陥る危険性がある中で、チームの応援活動を熱心に行っている補欠アスリートの心情を具体的に明らかにすることが、補欠を含む全てのアスリートのライフスキル獲得を含んだ心理的成長と、より良いスポーツ実施環境を作る重要な足がかりとなる。

以上のことから本研究では、運動部活動に所属し、チームの活動の一つである応援活動に従事する補欠の学生アスリートの事例を基に、「学生アスリートは応援活動をどのように語るのか」というリサーチ・クエスション（以下 RQ）の下、応援活動をどのように捉え、どのような思いで関わっているのかの心理的変容プロセスを明らかにすることを第一の目的とする。そこから探索的な仮説生成を経て仮説的知見を導き出し、応援活

動の意義と、アスリートのより良いスポーツ環境作りに寄与するための、スポーツ現場で活かせる成果を提示することを最終的な目的として研究を行っていく。

2. 方法

2.1. 情報提供者の選定

本研究は、試合に出場出来なかった補欠の学生アスリートが応援活動をどのように捉え、応援活動を通じてどのような心理的過程を経るのかを明らかにすることを目的とする。その際、上述した応援活動の機会の有効な活用法を見出すためには、より積極的に応援活動に関わっている中でのエピソードを聞きだす必要がある。よって研究の対象は、部活動に消極的な関わりを見せている者ではなく、応援活動を含む部活動に日々熱心に取り組んでいる現役の学生アスリートであることが必須である。また、先に述べた山崎・鈴木（2015）のように、サポーターとしての関わりを部活動の価値として見出しているアスリートは、立場に関わらず熱心に応援活動に従事出来ることが考えられる。しかし、上述した心理的葛藤が起り得る問題を考慮すると、その点を明らかにするためには、初めから試合への出場の可能性が無い者ではなく、公式戦出場の可能性のある所属部活動のトップチームに属する者であることが望ましい。そして、より応援活動の意味を実感的に語ってもらえるように、試合に出場し応援された経験と、試合に出場出来ずに応援した経験の両面を経験したアスリートであることも同様に望ましい。以上のことから本研究では、「存在や意味や価値といったものは、すべて身体や欲望、関心、目的といったものと相関的に規定される」と定義される関心相関性を基にした、関心相関のサンプリング^{注1)}（西條，2007）に則り、「部活動に日々熱心に取り組む現役学生アスリート」「公式戦に出場する可能性のあるトップチームに所属している」「応援をする、されるの両面から経験している」「現在補欠である」という関心の下、スポーツ系大学の球技系集団競技種目の部活動のトップチームに所属し、公式戦に出場経験がある学生アスリート1名（20代前半、男性、調査時大学4年生）を情報提供者（Informant，以下 Inf.）とした。Inf. の

競技の経緯として、大学2年次よりトップチームに所属し、そこからメンバー登録され試合に徐々に出場し始め、3年次には継続して出場するようになるも、調査時の4年次には出場機会が少なくなっているという状況であった。なお、Inf. 選定にあたり、上述した本研究の関心事に則し、部の活動全般に熱心に取り組んでいる学生アスリートの推薦を所属部活動の指導者4名へ依頼した。その結果、4名全員の推薦によりこのInf. が選定された。よってこのInf. は、他者評価においても本研究の関心事に沿っていると言える。

2.2. 個別事例による研究について

上述のように本研究では、1名の事例を基に分析を進めていく。個別事例による研究は、事例の持つ個性の提示と、類推に基づく成果の一般化の観点からその機能性が挙げられている。例えばMcLeod & Elliott (2011) は事例研究の固有の強みとして、①複雑性（個別の事例から多くのことを観察出来るため、異なる要因やプロセスの相互作用の複雑なパターンの分析が可能になる）、②縦断への感度（一連の多様な観察から、時間に伴う変化や展開を詳細に検討出来る）、③文脈の評価（サンプル数の多い研究では困難な文脈的な要因の影響の調査を可能にする）、④ナラティブとしての知（読者に忘れがたい物語を伝え、実践を導く既存の行動スキーマへと容易に転化できる知識を提供する）を挙げている。つまり、大規模調査では得られない事例の詳細な調査を行うことができ、実践へと転化可能な知見を導き出すことが事例研究の強みである。そのため、渡邊 (2013) によってその役割が述べられているように、特に臨床心理学分野において、実践に活かせる理論生成の方法の一つとして重要視されている。また、学校教育や看護学等においても、特殊な少数事例について深く調査し、その詳細な個性を提示する際にしばしば用いられている（例えば、枝川・辻河, 2011；中山, 2012）。併せて、事例研究は個性の提示だけでなく、類似例への活用も視野に入れながら実施されている。西條 (2009) は、事例研究によって得られた成果について、詳細や構造化に至るまでの過程を明記することによって、その成果を類推し一般化することが可能であ

ると述べている。つまり、一事例の個性の提示であっても、他者の関心に基づいた類推を可能にする情報が詳細に提示されている場合は、類似例への活用可能な一般化可能性を備える有益な知見として捉えることが可能になる。本研究の対象者は、部活動における補欠の文化や彼等を取り巻く環境を鑑みると個性の高い事例であり、尚且つその個性の提示がスポーツ現場をより良くするための一助となる可能性が示されている。よって本研究ではそれらの観点から、ある事例の特性を明らかにすることで一般性の理解や現場における実践に役立たせることが出来る事例分析（桂・星野, 2012）の視座を採用した。そこで得られた語りから、スポーツ現場におけるチーム力向上と補欠アスリート支援について探索的に仮説生成をし、成果を提示することを目標に分析を行った。同様に対象者に関しては、西條 (2007) の関心相関的サンプリングに則り研究目的に関してある程度の背景を持った対象者の抽出を行っている。つまり本研究は、演繹的な仮説検証や帰納的な仮説生成ではなく、「われわれが保有している既存の知識をもとに、観察事実を説明付けるような仮説を積極的に導き出そうとする推論」（赤川, 2011）とされるアブダクション^{注2)}の観点からある程度の理論的枠組みを持ちながら仮説生成を行った。

2.3. 調査期間と調査内容

調査はInf. が4年次のリーグ期間中である20XX年11月に、1時間半程度の1対1の半構造化インタビューを用いて行われた。インタビューについては、過去にインタビュー調査による質的研究を実施した経験があり、部活動に関わりを持つ筆者が担当した。その際、守られた空間で安心して語れるようInf. が所属している大学の静かな研究室内で実施した。また、インタビューはよりリアルな心情を聞きだせるよう部が所属するリーグの公式戦期間中に実施した。具体的なインタビュー内容として、Inf. が応援を経験してから今に至るまでに焦点化し、学生アスリートが応援をどのように捉え、どのような思いで応援に関わっているのかを明らかにすることから、応援の印象や、応援をしているまたは自分が応援されている際に感じること、そこから発展し試合への思いや応援の

必要性等を中心にインタビューを行った。このような質問を中心にインタビューガイドを基に進めたが、Inf. の話の流れに合わせて臨機応変に質問を変化させる半構造化インタビューの特徴（戈木、2005）を重視しながら柔軟に調査を行った。併せて、回顧的語りや社会的望ましさによるバイアス防止のため、徳田（2007）の方法を参考に、研究目的の説明と共に、調査者の関心は社会通念上の一般的な見解でなく、Inf. 自身の経験や考えにあるため、経験したことを出来るだけリアルに、率直に語って欲しい旨を Inf. に伝えた。

また、本研究の問いは学生アスリートにとってプライベートな心情を語りとして表出するものであるため、語りをデータとして扱う際には倫理的配慮に留意し、守秘義務等を徹底しなければならない。研究を行うにあたって所属機関の倫理審査を通過すると共に、個人情報保護を最優先事項とし、研究の手続きの詳細な説明と研究参加、インタビューの音声データとしての録音についての同意を得られた上で調査を開始し、その後のデータの取り扱いにも細心の注意を払って研究を行った。

2.4. 分析方法

本研究は学生アスリートの語りを基に分析を行うため、質的研究法（ストラウス・コービン、1990）を採用した。質的研究法で得られた質的データの分析方法はいくつか種類があるが、本研究では山浦（2012）の質的統合法を参考に分析を行った。質的統合法は KJ 法（川喜多、1986）を継承した質的研究法で、個別の事例の把握と共に全体像の構造的な表示による普遍性や法則性の追求を目指した方法論であり、看護や医療現場の実践研究等で用いられることが多い。本研究においても、1 事例から全体像とその関係性を把握し、研究成果を現場で活かせる知見とすることを目的としているため、分析方法として採用した。これらを踏まえ、質的統合法を参考に具体的には以下の手順で分析を行った。

①ラベルづくり：インタビューを基に作成した逐語録を発話データとし、その発話データから関連する語りを切り分け、単位化することでラベルを作成する。その際、シール状の「ラベル」を使用

しデータを書き込むことから本行程は「ラベルづくり」と称される。

②ラベル広げ・集め：作成したラベルを広げ、類似した内容のラベルを収束する。

③表札づくり：収束したラベルの内容をまとめ、「要するにこんな感じである」と一文で表す「表札」を作成する。

④グループ編成：②と③の作業を繰り返し検討することでラベルをさらに集約し、いくつかのグループとしてまとめる。

⑤見取り図の作成：集約したラベルの内容を、そのエッセンスを凝縮した「シンボルマーク」として表現する。その後、各シンボルマーク間の相互関係と配置をより明確にするために、関係記号と、その関係記号の主たる意味を表す添え言葉によって接続詞的な説明を添えて図解し、可視化する。

⑥叙述化：図から明らかになったことを 1 つのストーリーとして記述する。

これらの手順を解釈に偏りが出ないよう、スポーツ科学および質的研究に精通する大学教員 1 名と大学院生 1 名に著者を併せた計 3 名で検討を行い、質の向上に努めた。なお、上述のように質的統合法は KJ 法を継承したものであるため、本来「質的統合法（KJ 法）」と記載するのが正式であるが、山浦（2012）に倣い、煩雑さを避けるために本文では「質的統合法」と簡易表現での記載を採用する。

3. 結果

質的統合法を用いて、本研究の目的である学生アスリートが応援活動をどのように捉えているのかという観点を基に分析を行った。具体的には、上述した分析方法に則し、まず Inf. の語りから応援活動についての語りを抽出した。次に、応援活動との関わり方やその際の心情を中心に、応援活動に熱心に従事するまでの経験に関連する語りを抜きだし、それぞれにラベルをつけた。そこから、類似しているラベルの集約と表札づくりを繰り返しながらグループ編成を行った結果、生成されたラベルを最終的に 13 個に集約し、各ラベルの内容を凝縮した表現をシンボルマークとして記入した（表 1）。以下に語りを基にしたシンボルマーク生成までの内訳と、それらの関係および経

験の流れについて順を追って記述をしていく。なお、シンボルマークは『 』、シンボルマークをさらにまとめた部分は《 》、Inf. の語りについて

ては「 」で示す。また、倫理的配慮の観点から、語りの中で個人が特定されそうなものに関しては【 】で囲み、その中に説明文を挿入した。

表1 Inf. のシンボルマーク、集約ラベル、元ラベルの代表例

シンボルマーク	集約ラベル	元ラベルの代表例
①応援という文化に入り込む	今までは経験してこなかった応援という文化がある世界に入り込む	応援の経験は大学入ってからで、高校も部員が少なくてもなかったです。他のチームが、【高校名】とかやる時は部員数が多くて、わり何か応援してんなーくらいで。僕等のサイド見ても誰もいないみたい。そんな感じでしたね。トップの試合とかでもみんな出来るだけ帯同して応援するじゃないですか。だから応援は大学が初めてですね。
②プレーしながら応援の頼もしさを感じる	自分自身がプレーする中で応援という存在がいる頼もしさを感じる	応援が頼もしいっていうのはありますね、あそこにも誰もいなかったら何も入ってこないですもんね。
③応援が選手の力になっていると感じる	チームの応援が何かしらの形で選手達の力になって勝敗に影響していると感じる	まあ何かしらなってると思います。応援で体力アップとかはないですけど、でも何かしら、例えば応援自体がもうメンタル面みたいのもんじゃないですか。しんどい時にあれだけ応援してくれるから頑張ろうくらいの。極僅かかやと思ってますけど。でもその極僅かの差がもしかしら勝ちなのかもしれないです。
④悔しさから素直に応援出来なくなる	試合に出られない悔しさから、情熱が薄れたり同じポジションの選手を素直に応援出来なくなる	まあ難しいですね、出てる奴ら、というと同じ【ポジション名】でポジション被ってる奴とかはもう、ミスしろとか思ってたんですけど。それは絶対、言っちゃダメですし口では、あんま行動にも出さない方が良いでしょう。
⑤悔しさからチームに悪影響を与えてしまう	試合に出られない悔しさから態度や立ち振る舞い等で、チームに悪影響を与えるような行動をしてしまう	僕も悔しさのことから言うと、出れない時に、何で出れないんだって思ってたんですよ。まあ結局それは自分が悪かったっていう話なんですけど、技術が低いとか、調子が悪いとか。でもその時は本当に出れないのがマジで悔しくて、イライラしてて。本当にチームに良い影響を与えてなかったというかな。
⑥両方向からの応援の必要性を感じる	応援する方、される方の両方向からの捉え方で応援の必要性を感じる	間違いなく必要ですね。どっちからの捉え方をしても必要なんじゃないかなと思います。(どっちも?) はい。やってる側、プレーしてる側、応援されるものもするのも大事なと思います。
⑦自身が持つ責任を認識する	立場や役割等から、自分勝手な行動をしてはいけないという自分自身が持つ責任を認識する	やっぱり【学年】っていうのもあって、トップがそれで良いのかっていう、トップの選手がそれで良いのかっていう。責任はあるじゃないですか。トップでやってる、上で。自分のチームなんで、たぶん自分勝手な行動だけでは、ダメなのかなっていう。
⑧悔しさを持ちながらも応援に専念する	自分の取り組みへの後悔と試合に出られない悔しさを持ちながらも、今は応援に専念しようという気持ちを持つ	悔しいけど、でもその時盛り上げなきゃいけないっていう気持ちはあるかもしれないです。
⑨応援で仲間の力になりたいと思う	同じチームで闘う尊敬出来るチームメイトに、応援を通じて少しでも力になりたいと思う	PKとかもこっちから後押しするみたいな。何かがもし聞かえてるんやったら、例えばあいつらが応援してくれてるからここは頑張らなくさやいけないみたいなことを思ってくれたら良いかなぐらいの、とりあえず大きい声出して。僕も応援されてる時はふとした瞬間しか入ってこないんで、絶対あいつ等も毎回毎回入ってきてるわけじゃないっていうのはわかってるんで。
⑩応援によってチームの一体感が生み出される	試合に出ている選手も期待する、応援があることによって生み出されるチームの一体感や力を感じる	今勝ってるのもトップで出てる奴らの技術とか戦術とかもちろんそうですけど、出てる人達はみんな応援があるからって言うてくれるじゃないですか。見ててこっちも一体感、みんなと聞えるというかな。まあ楽しいし、プロチームのような感じで。僕はそういうの色々含めて応援が出来る環境なら、こうやって人数がいるならやるべきだと思います僕は。
⑪応援をきっかけに自身の変化に気づく	応援をしている時に、単にするだけではなくその場をきっかけに、自身に様々な変化が起きていることに気づく	何かのきっかけにはなるかもしれないですね、向上心とかの。例えば何か言うとしたら、応援だけやってればいいわけじゃないじゃないですかもちろん。それを見て、試合を見て、刺激をもらって。試合を見て刺激をもらって自分の練習に取り組み姿勢だったり、サッカーにかける時間は変わったかもしれないです。
⑫応援の経験を通じて主体性を獲得する	応援という経験を通じて、チームの活動はもちろん、自主練等個人の活動においても主体性を持って取り組めるようになる	応援って自分がしたいと思ってするものなんで。(したくてするもの?) そうですね、させられるものではないと思います。それは練習とかでも一緒だと思いますし。
⑬応援という機会に意味を見出す	真剣に応援活動に取り組むことで、数字では表せない応援の力や応援自体の楽しさ等の、それぞれが感じ取るもので意味を見出していく	応援でさっき言ったチーム感は必ず得られますし、盛り上げ、やっぱりこっちから盛り上げないってのはありますね。応援することで、必死に応援すれば人それぞれ何か感じるものはあると思います。

①『応援という文化に入り込む』

近年、応援団のような大規模な応援活動を行う部は少なくない。しかし、「応援の経験は大学入ってからで、高校も部員が少なくなくて強くもなかったです。他のチームが、【高校名】とかやる時は部員数が多くて、わー何か応援してんなーくらいで。僕等のサイド見ても誰もいないみたいな。そんな感じでしたね。(以下略)」と語るように、応援活動は強豪校と称される部員数の多い部活動で見られるもので、Inf.自身は大学入学まで経験したことが無かった。併せて、そのようなチームの応援活動についてInf.は、「応援がある文化に入っただけということとはそうじゃないですかね」と、応援活動をその部活動の文化として位置付けていることを語っていた。ここでInf.は、応援活動を行っている部活動がある大学に入学することで、未経験であった『応援という文化に入り込む』こととなる。

②『プレーしながら応援の頼もしさを感じる』

③『応援が選手の力になっていると感じる』

応援という文化に入り込み活動をしていく中で、Inf.は応援について様々な気持ちを抱くようになる。自身が試合に出場しプレーしている際には、「僕はキーパーと1対1を外したんですけど、その時に、何故か知らないんですけど歓声があったのは感じたんですよ。こけるっていうか倒れ込むようなシュートやったんで、そのまま外した時に倒れて上ずって見てたんですけど、その時にまあ、次！次！みたいな、そういう言葉がずっと入ってきましたね。」と語るように、決定的な場面でミスをしてしまった時に、応援から聞こえた声に後押しを受け気持ちを切り替えられた経験から、『プレーしながら応援の頼もしさを感じる』ようになる。それと相俟って、自身が試合に出場出来ずに応援活動に従事する際には、「僕等の声が届いた時に、そういうのを見てあー今日もしてくれてるんだなあとか、(中略)まあ少なからずたぶん、何か思ってくれていると思いますし、あいつらのためにも頑張らなきゃいけないっていう。」と述べている。このように、自身が試合に出ているチームメイトを応援している時には、彼らにその頼もしさが伝わっており、その頑張りを

促進していると感じ、『応援が選手の力になっていると感じる』ようになることをInf.は語っている。

これらの語りから見られるように、Inf.は応援という文化の中で活動することで、応援が試合に出場している選手の実力発揮の後押しをしていると感じる。これら2つのシンボルマークを《応援のポジティブ面》としてまとめて表した。

④悔しさから素直に応援出来なくなる

⑤悔しさからチームに悪影響を与えてしまう

上述のようにInf.は、応援に対してポジティブな面を見出す。しかし一方で、Inf.自身も試合に出場する資格を持った選手であることから、出場出来ない試合を目の当たりにしながら応援することに対して、否定的な感情も同時に抱くようになる。「やっぱり選手個人としては、僕の経験からするとぶっちゃけ素直に応援するのは難しくって。何ですかね、複雑、かなり複雑ですね。」と語るように、自分自身を一人の選手として捉えた際に、試合に出場出来ないことに対して上手く表現出来ないような複雑な思いを抱き、『悔しさから素直に応援出来なくなる』状態に陥る。その状態に陥ると、「僕も悔しさのことから言うと、出れない時に、何で出れないんだって思ってたんですよ。まあ結局それは自分が悪かったっていう話なんですけど、技術が低いとか、調子が悪いとか。でもその時は本当に出れないのがマジで悔しくて、イライラしてて。本当にチームに良い影響を与えてなかったというか。」と述べるように、出場出来ないイライラをうまく消化出来ずに表面化してしまい、『悔しさからチームに悪影響を与えてしまう』ようになってしまう。

これらのように、応援活動が求められる文化に入り込むことでInf.は、試合に出られない悔しさを持ちながらも、チームの活動として応援をしなければならない状況を迎える。その際に悔しさから素直に応援が出来ないというような行動を表面化してしまい、結果としてチームに悪影響を与えてしまう。これら2つのシンボルマークをまとめて、《応援のネガティブ面》として表した。

⑥両方向からの応援の必要性を感じる

Inf. は試合において、今まで経験したことがなかった応援活動というものの必要性を自身の経験を基とした《応援のポジティブ面》から感じ取るようになる。それは「間違いなく必要ですね。どっちからの捉え方をしても必要なんじゃないかなと思います。(筆者:どっちも?)はい。やってる側、プレーをしてる側、応援されるのもするのも大事だと思います。」という Inf. の語りから理解出来る。

ここで Inf. は、自身が試合に出場しプレーをしている際に応援の声で後押ししてもらった経験、そして自身が応援している際にはその声援が出ている選手に確かに届き力になっている実感を持った経験から、試合における応援の大切さ、つまり『両方向からの応援の必要性を感じる』ようになる。

⑦自身が持つ責任を認識する

Inf. は応援という文化に入り込むことで、出場出来ない試合を応援しなくてはならないことに悔しさを生起し、そのイライラを表出してチームに悪影響を与えてしまう等の《応援のネガティブ面》も感じるようになる。しかしその一方で《応援のポジティブ面》も確かに認識しており、それを基とした『両方向からの応援の必要性を感じる』ようになっている。それに影響され、チームの力になる応援活動に携わる自分自身の行動を改めて振り返った Inf. は、「(前略) トップの選手がそれで良いのかっていう。責任はあるじゃないですか、トップでやってる、上で。自分のチームなんでね、たぶん自分勝手な行動だけでは、ダメなのかなっていう。」と語った。

この時 Inf. は、試合に出られなかった悔しさからチームに悪影響を与えてしまった自身の行動を振り返り反省することで、自身のチームにおける立場や役割を再確認し、そこから『自身が持つ責任を認識する』ようになる。

⑧悔しさを持ちながらも応援に専念にする

試合に出られないことに悔しさを感じる中で、自身の行動を振り返り、立場や役割と共に自身が持つ責任を認識した Inf. はその後、その責任感を

基に、「悔しいけど、でもその時盛り上げなきゃいけないっていう気持ちはあるかもしれないです。」と語るように、チームの勝利のために今出来ることを探り、応援の際にはチームを盛り上げるのが自身の役割であることを認識する。

ここでは、Inf. が「後から考えたらもっとやれたんじゃないかなとは思いますがね、色々取り組みとか。でもまあ応援の時は応援に専念出来ます。」と語るように、出場メンバーから外れ悔しさから色々考えを巡らすが、立場や役割等を省みて、『悔しさを持ちながらも応援に専念する』ことで、チームで活動する際の自身の責任を果たそうと気持ちを固める。

⑨応援で仲間の力になりたいと思う

責任感を基にチームのために応援に専念することを決めた Inf. は、よりチームの一員として行動をするようになる。試合に出場出来なかった Inf. は、「(前略) 同じ選手として尊敬してて、同じチームで闘った奴らだし、そういうのを考えるとそいつらの何かになりたいたいっていうのは、そういうのはありますね。」と述べるように、応援の必要性を実感し、チームの勝利のために同じチームで活動する尊敬出来るチームメイトを最大限にサポートし、応援で彼らの実力発揮の後押ししようとするようになる。

Inf. はここで、責任感から応援に専念することを決意し、尊敬するチームメイトに対して自身が出来ることとして、『応援で仲間の力になりたいと思う』ようになる。

⑩応援によってチームの一体感が生み出される

仲間の力になりたいと思い、チームの一員として試合に勝利することを目指して応援に専念した結果として Inf. は、応援活動によって生み出されるものを感じるようになる。それは Inf. の「ベンチに座ってるスタッフとかもいるじゃないですか、選手とかも。そういう人達にも確実に伝わってると思うんで。」という語りからも読み取れるように、出場している選手だけでなく、ベンチにいる控えの選手や、スタッフにも応援の力が伝わっているような実感を持っていることが分かる。

加えて Inf. が、「よりチームだになっていう、そういうのを生み出せる場かなと思います。」と語っているように、応援をすることで出場している選手の力になるだけではなく、ベンチにいる控えの選手やスタッフ、補欠である自分達を含めてチームとしてまとまって試合に臨んでいるような、「応援によってチームの一体感が生み出される」ことを実感している。

⑪ 応援をきっかけに自身の変化に気づく

Inf. は上述したチームの一体感だけでなく、応援活動に専念したことをきっかけに自身の変化への気づきも生み出すようになる。試合に出られない悔しさを抑えてチームのために応援に専念することで Inf. は、「(応援する中での変化について) 一番前で大きく声出すようになったことですかね。なんか昔は、やっぱ応援っていうのが初めてだったというのがあって、恥ずかしさみたいなのがあったんですよ、声出して叫んでるっていうのが。こういうのがあったおかげで今何とも思わなくなりました。」と語っている。また、「何かのきっかけにはなるかもしれないですね、向上心とかの。例えば何か言うとしたら、応援だけやってればいいわけではないじゃないですかもちろん。それを見て、試合を見て、刺激をもらって。試合を見て刺激をもらって自分の練習に取り組む姿勢だったり、競技にかける時間は変わったかもしれないです。」と語るように、応援活動を単に応援だけをする場ではなく、試合を見ることでの学びをその後の練習等で活かすような刺激を得ようとしていることが見受けられる。

このように Inf. は、応援に積極的に関わることで、チームの応援活動を通じて自分の行動や態度が変化していき、『応援をきっかけに自身の変化に気づく』ようになる。

⑫ 応援の経験を通じて主体性を獲得する

上述のように Inf. は、応援活動を通じてチームでは一体感を、そして自身では変化への気づきを生み出すようになる。それらを基に、「応援って自分がしたいと思ってするものなんで。(筆者：したくてするもの?) そうですね、させられるものではないと思います。それは練習とかでも一緒

だと思いますし。」と語るように、応援がチームの一体感を生み出す要因となることへの気づき、そして自身の変化への気づきをきっかけに、主体性を持った自発的な応援へと変化し、それをさらに普段の練習の姿勢へとつなげていくことが読み取れる。

要するにここで Inf. は、自身の変化のきっかけおよびチームの一体感を生み出せる要因は自身が応援に取り組む姿勢にあると感じ、応援に主体的に取り組むことで、『応援の経験を通じて主体性を獲得する』ようになる。

⑬ 応援という機会に意味を見出す

応援という文化に入り込むことで様々な経験と気づきを得た Inf. はその後、自身の応援活動を振り返る。「応援でさっき言ったチーム感は必ず得られますし、盛り上げ、やっぱこっちから盛り上げないといけないというのはありますね。応援することで、必死に応援すれば人それぞれ何か感じるものはあると思います。」と語るように、上述したチームの一体感と主体性と共に、応援活動の場は何かを得られる場であると捉えている。そこから「他人はどう捉えるかはわかりませんが、僕はそこに必ずいるべきだと思います。」と最終的に自身がどのような立場や役割であれ、チームの一員としてそこに在るべき者であることを確信するようになる。

ここで Inf. は、補欠になった際に自身が関わってきた応援という活動を振り返ることによって、得たものや考えたこと、気づいたことを包括して『応援という機会に意味を見出す』ようになる。

以上の結果から、それぞれのシンボルマークの関係と配置を考慮し、見取り図を生成した(図1)。見取り図は上述した結果を基に、学生アスリートが応援の活動を通して様々な経験の中からその意味を見出していくプロセス図となっており、「学生アスリートが応援に意味を見出すプロセス」と名付けた。なお、図1に関して、各シンボルマーク間の関係をより詳細に確認出来るよう、山浦(2012)を参考に、図1下部に関係記号と添え言葉についての詳しい説明を示した。

図1 学生アスリートが応援活動に意味を見出すプロセス

4. 考察

分析手続きとして最終的に、上述の結果から得られた見取り図を基に成果の叙述化を行う。本研究の成果としてRQである「学生アスリートは応援活動をどのように語るのか」に対して、「学生アスリートは『応援という文化に入り込む』ことで、『応援のポジティブ面』と『応援のネガティブ面』という二律背反を経験し、ポジティブ面を基にした『両方向からの応援の必要性を感じる』ことに影響され、ネガティブ面から転じて『自身が持つ責任を認識する』。それを基に『悔しさを持ちながらも応援に専念する』ことに伴い『応援で仲間の力になりたいと思う』気持ちが生まれる。そこから『応援によってチームの一体感が生み出される』ことを感じ、同時に『応援をきっかけに自身の変化に気づく』ことをきっかけに『応援の経験を通じて主体性を獲得する』ようになり、最終的に『応援という機会に意味を見出す』場であると語った」という仮説的知見を導き出した。

導き出された知見を基に、理論的な考察を加えていく。学生アスリートはまず、補欠として応援活動を経験する上で、応援に対してポジティブ面とネガティブ面という二律背反な印象を抱き、その間で葛藤することになる。この葛藤は「応援の良さは理解しているけれど、悔しさで素直に応援出来ない」というものであり、レヴィン（1935）が述べている心理的葛藤の中でも接近回避型に該当し、明確に解決することが難しいとされている。その際に学生アスリートは、選手として試合に出られない悔しい気持ちを持ちながらも、仲間の力になるために自身の気持ちに折り合いをつけ、チームの活動である応援に専念する。これは、答えを見出すのが難しい心理的葛藤に対して明確に解決策を見出そうとするのではなく、個体と環境の間の心理的調和と表現される適応（澤田・古畑，1978）をしていくことで対処しているのではないかと考えられる。

次に、学生アスリートは自身の責任を認識した

上でチームに関わり、応援によってチームの一体感を生み出す。この一体感は、チームワークを構成する心理的側面の代表的な概念であり、チームのまとまりの程度を認識する概念である集団凝集性 (Carron, 1982) の高まりであると捉えることが出来る。苦労体験の共有やサポートの享受および仲間への信頼が集団の結束を高めること (尼崎・清水, 2008) を考えると、学生アスリートは応援活動で生じる様々な経験を通じてチームメイトや周囲との心理的な関わりを増加させ、チームの集団凝集性を向上させている可能性が示唆された。併せて部活動における集団凝集性は、Bandura (1982) が提唱する集合的効力感に影響する可能性があると示唆されている (尼崎・清水, 2008)。集合的効力感は「ある特定の状況において我々は集団として課題に取り組むことができる」といった成員間で共有される集合的な有能感」と定義されている (内田ほか, 2011, p.492)。また集合的効力感について Bandura (1982) は、好ましくない結果に対する耐久力に影響すると述べており、持田ほか (2015) は、責任ある行動が集合的効力感に正の影響を与えることを示唆している。それらと本研究の成果を照らし合わせると、学生アスリートは応援を通じて自身の責任を認識し、試合に出られない悔しい状況に耐え、チームの一員としてチームの勝利という課題に取り組んでいくという経験により、集合的効力感も併せて向上させている可能性が示唆された。Carron & Mark (2011) はコミュニケーションスキルの向上がチームのパフォーマンスに影響することを述べている。また、持田ほか (2015) は、時として競技レベルで劣っていたとしても、チームワークの高さを感じさせるチームが試合に勝利するという場面がスポーツ現場では見られることを述べている。そして、「やるに当たっては僕等は応援でも絶対負けないう気持ちがあります」という Inf. の語りからも窺えるように、応援活動による集団凝集性と集合的効力感の向上が、出場選手の競技パフォーマンスに影響する可能性は十分に考えられる。

続いて、本研究の結果から、学生アスリートは応援活動を通じて主体性を獲得することが示唆された。スポーツ集団における個人の主体性、自身をマネジメントする能力は「スポーツ・セルフマ

ネジメントスキル」と呼称されており (竹村ほか, 2013, p.486)、「集団の競技パフォーマンスに正の影響を与える、選手自身が主体的に思考・行動し、実践する自己活用力」と定義されている。スポーツ・セルフマネジメントスキルは、社会的手抜きや逸脱行為など集団内で発生する負の出来事の防止や抑制に効果があることが明らかにされており、チームの一員として活動する際には重要なスキルと言える。これらを鑑みると、応援活動を通じて主体性を獲得した学生アスリートにとって応援活動の場は、スポーツ・セルフマネジメントスキルを育む機会になる可能性が示唆された。また、このスポーツ・セルフマネジメントスキルは集団凝集性と集合的効力感にも正の影響を与えていることが述べられている (竹村ほか, 2013)。上記と併せて、応援活動による主体性の獲得は、スポーツ・セルフマネジメントスキルの観点から、集団凝集性や集合的効力感にも影響を与えていることが考えられる。

そして、学生アスリートは自身が関わった応援活動を振り返った際に、応援という機会に意味を見出そうとする。アスリートのパーソナリティ変容に着目すると、スポーツに対する参加動機が見直されるような危機の際にアスリートの心理的成熟が促進されることが示唆されている (杉浦, 1996)。本研究において補欠を経験した学生アスリートが、応援で生じる心理的葛藤による部活動への参加動機を脅かされる危機に適応し、チームのために活動しそこでの気づきを自身の行動に活かしていく過程は、杉浦 (2001) が示す心理的成熟のプロセスと合致する結果となった。この危機を乗り越えてそれに対する意味づけという語り直しを行うことで、アスリートはより適応的にこれからの危機に対して耐性を持ち、応援においてチームのために活動するようになるだけではなく、応援の機会を自身の活動に活かすように変容していく。要するに応援活動を通じて心理的成熟の促進が期待出来ることがここで示唆された。

本研究の成果として、叙述化したストーリーと考察を以下の4つに集約した。

1) 応援活動で生じた心理的葛藤への適応による心理的成熟の促進。2) 応援活動を通じて集団凝集性および集合的効力感が向上する可能性の示

唆。3) 応援活動がスポーツ・セルフマネジメントスキル育成の機会となる可能性の示唆。4) 応援活動を通じた学生補欠アスリートの心理的変容プロセスの視覚化。

これらの成果は、応援活動に従事する学生アスリート、つまり補欠アスリートにとって、試合だけでなく応援の機会も自身のスポーツ活動の充実に活かすことが出来るというモチベーションの維持、そしてそれを自身の成長のきっかけとして活用出来るということから有益な仮説であると言える。また、集団として考えても、応援活動は集団凝集性および集合的効力感を向上させる機会として、チームにとっても貴重であることを明らかに出来たことは有用であると考えられる。そして、研究成果の4)の視覚化によって、実際に応援活動に熱心に従事する補欠アスリートの実感を伴った理解を可能にする。方法で述べたように、個別事例の詳細な過程の提示により、チーム力向上としての応援の必要性や、応援活動が競技力向上につながる可能性の示唆、応援活動やそれに関わる補欠アスリートの意義等、今後のスポーツ現場のより良い改善への展望が見立てられることが可能となる。併せて、このようなプロセスの視覚化は、先行研究でも問題視されている補欠の状況を踏まえ、補欠アスリートだけでなく部活動およびスポーツ現場の関係者が、補欠アスリートの存在や役割について改めて考え直す機会を生み出すことが出来る。その議論によって今後、応援活動の有効な活用方法や補欠という文化そのものの改善も含め、補欠アスリートがより良いスポーツ活動を行えるような環境作りがなされていくことが期待される。そして同時に、現在の補欠という文化において、補欠アスリートの重要な他者としての役割の明確化が、出場するアスリートおよびチームが実力を十分に発揮する場を作ることが可能となるため、本研究の成果は、スポーツ現場全体を発展させる一助となり得る実践的な知見であることが示唆された。以上のことより、本研究の知見は、補欠アスリートのモチベーション維持と彼らの応援活動への参加の促進、それに伴ったチームの一体感の向上、応援による学生アスリートの心理的成熟に寄与、およびスポーツ現場における補欠アスリートの役割やその文化に関する議論の活

性化を生み出すことが期待される。

5. 総括と今後の課題

本研究は学生アスリート1名の語りを基に、補欠となった学生アスリートが応援活動に意味を見出していくプロセスを明らかにし、視覚化した。なお、本研究は事例研究として1事例から仮説を形成した。質的研究の注意点としてしばしば一般化や対象者数の問題が指摘されている(寺下, 2011)。本研究は1名の事例ではあるものの、分析方法で述べた事例分析(桂・星野, 2012)の観点から考えると、これまで詳細に明らかにされてこなかった応援活動に熱心に関わる補欠アスリートの心情の詳細な記述によって、補欠という文化の理解と改善に貢献し得る知見であると言える。また、類推による一般化を経て、補欠アスリートの環境改善および応援活動の機会を有効に活かせる方法の検討等、今後の指導実践に役立てることが出来る知見として充分活用可能である。

しかし同時に、「大学4回生の集団競技に所属するアスリート」という、対象を限定した1名の事例での成果であることは本研究の限界でもある。スポーツ現場でよりリアリティを持った理論とするためには、本研究で明らかにした1事例のみでは捉えきれない部分を、関心相関性に則り調査対象者を増やしながらかき引き分析を重ね、生成した仮説との比較検討を経てより精度の高い強固な理論にしつつ発展継承していく必要がある。併せて、木下(2003)が、生成した仮説モデルは現場で必要な修正を行い実践的に活用することで仮説の有用性を検証することを想定していると述べているように、仮説の現場での活用可能性を探索しなければならない。よって今後は本研究の限界を踏まえ、上記の研究成果と視覚化した図を基に、スポーツおよび教育現場に携わる関係者と、知見の現場での活用方法や提示されたプロセス内でさらに明らかにしていくべき点の検討等の議論を通じて、発展継承的に展開していくことが課題として挙げられる。そして、補欠アスリートを含む全てのアスリートが、より良いスポーツ活動を送れる環境作りに貢献するための優れた理論となるべく検討を続けていく必要がある。

具体的にはまず、仮説の精緻化によって精度を

高めていくことが挙げられる。本研究で生成した仮説をベースとし、Inf.と同様の性質を持った複数の情報提供者への調査を重ね、本研究と同様の分析方法を用いてより多彩な経験をデータとして得ることで、単一事例ではなく、複数の経験者より語られたデータによって精緻化された仮説として、さらに信憑性を高めることが可能となる。また、本研究はInf.の経験の語りを基に分析し知見を導き出しているため、語られた事実と併せて、参与観察法等を用いて応援への関わりの経時的な変容過程を確認することで、仮説の質を高めていく方法も考えられる。そして、本研究は応援活動に前向きに取り組む補欠の学生アスリートを対象にしたが、必ずしもそのようなアスリートばかりではないことは容易に想像出来る。よって今後は様々な対象に目を向け調査を進めて行くことが求められる。例えば、図1にも見られるネガティブ面を考慮し、素直に応援出来ない補欠アスリートを対象にする、本研究のInf.のように最高学年の学生ではなく新入生に着目する等が、補欠アスリートの特性を広くカバーするためには重要である。このように対象を拡大し研究を進めていくことが、先行研究でも述べた補欠という文化によって葛藤や退部やバーンアウトを引き起こし、競技に支障をきたしてしまう状況の改善のために求められる。それらと本研究の成果との比較検討を行い、その違いや原因を明らかにしていくことで研究成果の1)で挙げた心理的成熟の促進の有無の確認を可能とし、より理論を発展させることが期待出来る。

そして、本研究の成果を確かな理論とするためには、量的な観点からの分析も必要となってくる。質的研究は仮説や理論の生成に長けているので、理論の一般化やそれぞれのつながりの度合い等、より具体性を持ったものにするためには、本研究で得られたデータを基に仮説の検証を行うことが重要である。特に成果の2)および3)の集団凝集性、集合的効力感、セルフマネジメントスキルについては、それぞれに対応する質問紙等を用いて、応援活動の機会による向上について今後検証していく必要があるだろう。

以上のような継承および発展を行い、全てのアスリートが充実したスポーツ活動を行える環境作

りのために、スポーツ現場をより良くしていくことが本研究の意義であると考ええる。今後は本研究で導き出した仮説を基に、様々な議論や研究を発展させ、スポーツの発展の一助とすることが期待される。

注

- 1) 関心相関的サンプリングとは、西條(2007, p.102)によって提示されている対象者のサンプリング方法で、「自分の関心(RQ)に照らして、(相関的に)対象者をサンプリングする」ものである。これは、西條(2007, pp.102-103)が同様に「研究を構成する全てのツールや材料は、①現実的制約を勘案しつつ、②RQや研究目的に照らして選ぶ」として提示している「関心相関的選択」のバリエーションの一つであり、それを対象者の選択に焦点づけると「関心相関的サンプリング」という考え方となる。本研究ではそれを基に、自身の関心を基準に情報提供者の選定を行っている。
- 2) アブダクションは論理的推論の一つであり、帰納と演繹に先立ち、それまでに説明を与えられていない不規則現象のうちに一つの仮説的秩序を見出す際の推論(山本ほか, 2006)である。その論理は単純枚举的な帰納法とは異なり、単なる観察事実の集積ではなく、「何か新奇のこと(A)が起こった。これを説明するのにある仮説(H)を使うと上手く説明できる。他に有力な仮説がない。だからAをHで説明できる」という形で結論を導く(住, 2010, p.38)ため、発想に基づく積極的な仮説生成を可能にする。

文献

- 赤川元昭(2011) アブダクションの論理. 流通科学大学論集 流通・経営編, 24(1): 115-130.
- Allport, F. H. (1920) The influence of the group upon association and thought. *Journal of Experimental Psychology*, 3: 159-182.
- 尼崎光洋・清水安夫(2008) 高校野球部員を対象とした集団効力感の研究—集団凝集性及び部活動ストレス—との関連による検討. 学校

- メンタルヘルス, 11: 23-31.
- 青木邦男 (1989) 高校運動部員の部活動継続と退部に影響する要因. 体育学研究, 34(1): 89-100.
- Bandura, A. (1982) Self-efficacy mechanism in human agency. *American Psychologist*, 37: 122-147.
- Carron, A. V. (1982) Cohesiveness in sport groups: Interpretations and Considerations. *Journal of Sport Psychology*, 4: 123-138.
- Carron, A. V. and Mark, A. E. (2011) *Group Dynamics in Sport* (4th ed.). Fitness Information Technology: West Virginia.
- 枝川京子・辻河昌登 (2011) LGBT 当事者の自己形成における心理的支援に関する研究—ナラティブ・アプローチの視点から—. 学校教育学研究, 23: 53-61.
- 藤本淳也 (2006) プロスポーツ・ファンの態度変容に関する研究—大阪近鉄バファローズ・ファンへの縦断的インタビュー調査—. 大阪体育大学紀要, 37: 57-72.
- 藤本淳也・原田宗彦・松岡広高 (1996) プロスポーツ観戦回数に影響を及ぼす要因に関する研究—特に, チームロイヤリティに着目して—. 大阪体育大学紀要, 27: 51-62.
- 林晋子・土屋裕陸 (2012) オリンピアンが語る体験と望まれる心理的サポートの検討—出来事に伴う心理的变化と社会が与える影響について—. スポーツ心理学研究, 39(2): 1-14.
- 井上功一・入口豊・大久保悟 (2010) 日本の大学競技スポーツ組織に関する一考察. 大阪教育大学紀要 第IV部門, 59(1): 1-12.
- 磯貝浩久 (1993) 運動パフォーマンスに及ぼす重要な他者の存在と自己効力感の影響. 九州工業大学情報工学部紀要. 人文・社会科学篇, 6: 101-109.
- 和秀俊・遠藤伸太郎・大石和男 (2011) スポーツ選手の挫折とそこからの立ち直りの過程: 男性中高生競技者の質的研究の観点から. 体育学研究, 56(1): 89-103.
- 桂和仁・中込四郎 (1990) 運動部活動における適応感を規定する要因. 体育学研究, 35(2): 173-185.
- 桂敏樹・星野明子 (2012) かんたん看護研究. 南江堂: 東京.
- 川喜多二郎 (1986) KJ 法 混沌をして語らしめる. 中央公論社: 東京.
- 木下康仁 (2003) グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践 質的研究への誘い. 弘文堂: 東京, 25-30.
- 公益財団法人日本高等学校野球連盟 (2019) 令和元年度加盟校部員数・硬式. <http://www.jhbf.or.jp/data/statistical/koushiki/2019.html> (参照日 2019 年 10 月 15 日)
- 黒川淳一 (2013) 全寮生活下にある高校生女子運動部員の精神健康度に関する調査研究 (その 2): 主に公式戦登録選手と補欠選手との比較を中心とした検討. スポーツ精神医学, 10: 80-94.
- Laveries, D. A. and Arnett, D. B. (2000) Factors Affecting Fan Attendance: The Influence of Identify Salience and Satisfaction. *Journal of Leisure Research*, 32: 225-246.
- レヴィン・クルト: 相良守次・小川隆訳 (1957) パーソナリティの力学説. 岩波書店. <Lewin, K. (1935) A dynamic theory of personality. New York: McGraw-Hill.>.
- McLeod, J. and Elliott, R. (2011) Systematic case study research: A practice-oriented introduction to building an evidence base for counselling and psychotherapy. *Counselling and psychotherapy research*, 11, 1-10.
- Mahony, D. F., Madrigal, R. and Howard, D. (2000) Using the Psychological Commitment Team (PCT) Scale to Segment Sport Consumers Based on Loyalty. *Sports Marketing Quarterly*, 9: 15-25.
- 持田和明・高見和至・島本好平 (2015) チームスポーツ競技における集団凝集性および集団効力感に影響する個人要因の検討—構成員のライフスキルが集団に及ぼす影響—. スポーツ産業学研究, 25(1): 25-37.
- 文部科学省 (2014) 文部科学白書 第 8 章 スポーツ立国の実現. http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/hpab201501/detail/1361998.htm (参照日 2019 年 6 月 20 日).

- 文部科学省(2000)教育白書 第7章 スポーツ振興と健康教育の充実に向けて. http://www.mext.go.jp/b_menu/hakusho/html/hpad200001_2_294.html (参照日 2019 年 6 月 20 日)
- 長友佑都(2011)日本男児. ポプラ社:東京, 107-113.
- 中込四郎・岸順治(1989)運動選手のバーンアウト症候群に関する概念規定への試み. 体育学研究, 34(3):235-243.
- 中山博夫(2012)外国語活動に関する校内研究が教師の意識に及ぼす影響に関する事例研究—東京都A区C小学校の事例に着目して—. 目白大学総合科学研究, 8:27-40.
- 野上真(1997)大学生運動部主将のリーダーシップ効果を規定する諸要因. 実験社会心理学研究, 37(2):203-215.
- 日本オリンピック委員会(2014)競技者・チームを取り巻く関係者の連携を促進することを目的としたディスカッションを実施. <http://www.joc.or.jp/news/detail.html?id=5629> (参照日 2019 年 6 月 20 日)
- 西條剛央(2007)ライブ講義 質的研究とは何か SCQRM ベーシック編. 新曜社:東京, 99-108.
- 西條剛央(2009)看護研究で迷わないための超入門講座. 医学書院:東京, 84-89.
- 戈木クレイグヒル滋子(2005)質的研究方法ゼミナール グラウンデッドセオリーアプローチを学ぶ. 医学書院:東京, 30-33.
- 澤田慶輔・古畑和孝(1978)人間科学としての心理学. サイエンス社:東京.
- セルジオ越後(2006)日本サッカーと「世界標準」. 祥伝社:東京, 192-199.
- セルジオ越後(2016)補欠廃止論. ポプラ社:東京.
- 渋谷崇行・小泉昌幸(2003)スポーツ活動を素材とした人間関係トレーニングの実施とその効果. 新潟工科大学研究紀要, 8:117-124.
- ストラウス・コービン:南裕子監訳(1999)質的研究の基礎 グラウンデッド・セオリーの技法と手順. 医学書院:東京. <Strauss, A. and Corbin, J. (1990) Basics of qualitative research: Grounded theory procedures and techniques. Sage Publications: New York.>.
- 杉本厚夫(2017)スポーツを「観る」ことと「視る」ことの相克:一駅伝・マラソンを事例として—. スポーツ社会学研究, 25(1):35-47.
- 杉浦健(1996)スポーツ選手としての心理的成熟理論構築の試み. 京都大学教育学部紀要, 42:188-198.
- 杉浦健(2001)スポーツ選手としての心理的成熟理論についての実証的研究. 体育学研究, 46:337-351.
- 住政二郎(2010)質的研究の科学性に関する一考察. 外国語教育メディア学会関西支部メソドロギー研究部会 2010 年度報告論集, 30-44.
- 隅野美砂輝・原田宗彦(2005)スポーツ観戦者行動における感情:尺度の開発とモデルへの応用. スポーツ産業学研究, 15:21-36.
- 竹村りょうこ・島本好平・加藤貴昭・佐々木三男(2013)スポーツ集団における学生アスリートのセルフマネジメントに関する研究:スポーツ・セルフマネジメント尺度の開発. 体育学研究, 58(2):483-503.
- 種谷大輝(2016)大学運動部における「補欠」のアンビバレンスに関する基礎的研究. 立教大学コミュニティ福祉学部紀要, 14:49-60.
- 寺下貴美(2011)第7回 質的研究方法論～質的データを科学的に分析するために～. 日本放射線技術学会雑誌, 67(4):413-417.
- 徳田治子(2007)半構造化インタビュー. やまだようこ編, 質的心理学の方法—語りをきく—. 新曜社:東京, p.107.
- Triplett, N. (1898) The dynamogenic factors in pacemaking and competition. American Journal of Psychology, 9:507-533.
- 上野耕平(2014)ライフスキル獲得を導く運動部活動経験が高校生の進路成熟に及ぼす影響. スポーツ教育学研究, 34(1):13-22.
- 内田遼介・土屋裕睦・菅生貴之(2011)スポーツ集団を対象とした集合的効力感研究の現状と今後の展望:パフォーマンスとの関連性ならびに分析方法に着目して. 体育学研究, 56(2):491-506.
- 渡邊誠(2013)臨床心理学における事例研究の役割に関する考察. 北海道大学大学院教育学研

- 究紀要, 118: 225-234.
- 山本教人(1991) 正選手と補欠選手の運動部への参加動機と原因帰属様式. 健康科学, 13: 49-58.
- 山本教人(1990) 大学運動部への参加動機に関する正選手と補欠選手の比較. 体育学研究, 35(2): 109-119.
- 山本利江・高橋幸子・河部房子・和住淑子(2006) 看護過程における評価の質的分析方法の開発: 看護者による日常的な評価の実態を追究するために. 千葉大学看護学部紀要, 28: 1-8.
- 山崎駿・鈴木秀人(2015) 高校生・大学生の運動継続に関する研究: 補欠選手が運動部活動に関わり続ける要因に焦点を当てて. 東京学芸大学紀要. 芸術・スポーツ科学系, 67: 121-127.
- 山浦晴男(2012) 質的統合法入門 考え方と手順. 医学書院: 東京.
- 横田匡俊(2002) 運動部活動の継続及び中途退部にみる参加動機とバーンアウトスケールの変動. 体育学研究, 47(5): 427-437.
- 米丸健太・鈴木壯(2015) 日本人大学生アスリートに認知された競技環境の構造に関する探索的研究. 法政大学スポーツ研究センター紀要, 33: 7-13.

2019 年 7 月 2 日 受付

2020 年 3 月 17 日 受理